

心理福祉分野の学士力基準構築のための 新しい取組(2)

—大学教育推進プログラムによる高度専門的職業人の育成—

中地 展生・成内 有奈・蓮花 一己

I. はじめに

帝塚山大学では、平成18年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の『心のケアとサポート』人材養成と自立支援—地域の活性化と安心・安全な社会の創造のための実践的教育—に採択され、その活動の詳細を蓮花・三木(2009)に報告した。さらに、平成22年度から文部科学省「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」(以下、大学教育推進プログラムと省略表記する)に採択された「心理福祉分野の学士力基準構築と人材の育成—心理福祉分野における実践力を備えた高度専門的職業人育成のための地域支援教育カリキュラムの再編成—」を実施している。本取組の目的は、心理福祉分野の学士力育成のために必要とされるカリキュラムを整備し、妥当性の高い評価システムを確立し、心理福祉学部での効果的な教育を実施し、高度な人材を育成することを目指すものである。これらの目的のために、帝塚山大学心理学部が中心となり、大学院人文科学研究科臨床社会心理学専攻と心のケアセンターが一体となって協力することで、心理福祉分野における効果的な教育を実施する。

平成22年度の取組に関しては、帝塚山大学

心理学部紀要第1号で報告した(中地ら, 2012)。本稿では、平成23年度の具体的な活動内容の紹介とその解説を行い、最後に今後の課題と展望を述べることにする。

II. 活動内容の紹介とその解説

ここでは、平成23年度に行った活動を中心に「地域支援カリキュラムの実施」「プロジェクトチーム活動」「評価基準の運用」「心理学部シンポジウムの開催と心理福祉勉強会の実施」「心理福祉教育推進室の運営と外部評価委員会の開催」の5領域ごとの内容の紹介とその解説を行うことにする。

1. 地域支援カリキュラムの実施

平成23年度の地域支援カリキュラムとしては、心理学科では「心理ボランティア実習」「グループカウンセリング実習」「アドベンチャーカウンセリング」「ボランティア論」「カウンセリング実習」があり、地域福祉学科では「ボランティア論(ボランティア・NPO論I)」「福祉総合演習」などであった。さらには、平成23年度から地域支援カリキュラムの中核となる心理学科・地域福祉学科共通の科目「地域支援論I・II」が新たに開講された。

平成23年度に実施された地域支援カリキュラムの前期の受講人数はTable 1に、後期の

受講人数はTable 2 に示した。地域支援カリキュラムは専門・応用的演習・実習科目群で実習中心であるため、これらの講義を受講することで、従来の授業では学ぶことができない実践的な学習を経験する機会となったと推測される。

さらに、平成23年度に開講された地域支援カリキュラムの中核となる心理学科・地域福祉学科共通の科目「地域支援論Ⅰ・Ⅱ」の受講対象は、現在、本学内外でのボランティア活動をしている学生、これからボランティア活動をしようと思っている学生、将来、職業人として地域支援に関わる仕事をしたいと考えている学生であった。その到達目標としては、ボランティア活動が学生自身にとって、より実りのあるものになるように、理論的・実践的な知識の裏付けをもってボランティア活動・地域援助活動ができる学生を育成すること、地域支援に関わろうとする学生に幅広い知識と実践能力を身につけてもらうことと

した。授業内容としては、心理学科の教員、地域福祉学科の教員が15回の講義の前半・後半を担当し、それぞれの専門領域についての授業を行った。この授業で提出された学生の感想レポートを「テキストマイニング」を用いて分析しているが、その結果については、

3. 評価基準の運用で取り上げることにする。

2. プロジェクトチーム活動

1) 心のケアセンター・学部でのグループワークによる子育て・発達支援活動

心のケアセンター内のプレイルームにおいて、子育て支援・発達支援のためのグループ活動（通称「のびのびクラス」）を行った。「のびのびクラス」は、グループ活動を通してコミュニケーション力、社会的場面におけるルールの理解といった社会的技能の向上を目指し、発達を促していくことを目的としたクラスである。対象は、小学校1～4年生で、社会的場面で課題をかかえる子どもとその保護者である。のびのびクラスでは、子どもた

Table 1 前期開講科目ごとの受講人数

科目名	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
地域支援論Ⅰ	77	23	57	0	157
グループカウンセリング実習	0	13	15	2	30
カウンセリング実習Ⅰ	0	8	14	7	29
アドベンチャーカウンセリングⅠ-1	0	9	1	1	11
アドベンチャーカウンセリングⅠ-2	0	10	6	0	16
アドベンチャーカウンセリングⅠ-3	0	3	3	0	6
アドベンチャーカウンセリングⅢ	0	0	3	3	6
ボランティア論（ボランティア・NPO論Ⅰ）	0	11	3	6	20
福祉総合演習	0	0	9	4	13

Table 2 後期開講科目ごとの受講人数

科目名	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
地域支援論Ⅱ	0	111	67	34	212
心理ボランティア実習Ⅱ	0	8	8	1	17
カウンセリング実習Ⅱ	0	9	13	8	30
アドベンチャーカウンセリングⅡ-1	0	8	2	0	10
アドベンチャーカウンセリングⅡ-2	0	7	1	0	8
アドベンチャーカウンセリングⅡ-3	0	4	5	0	9
ボランティア論	43	47	3	2	95

ちのかかえる問題や特徴によって2グループ（たんぼぼグループ、ひまわりグループ）に分け、第1クールは平成23年5月～平成23年9月まで、第2クールは平成23年11月～平成24年3月までとし、各クールにそれぞれのグループが隔週に1回1時間のグループ活動を、計8回ずつ行った。「のびのびクラス」では、2クール合わせて計18名の子どもとその保護者が参加した。「のびのびクラス」での活動内容は、子どもグループでは、ゲームなどの活動課題を設定し、集団活動を通して社会性の向上を図った。また、保護者のグループでは、自発的な話し合いの中で情報を共有し、体験を語り合うことで仲間作りをしていった。

そのなかに、毎回約10名の学生がボランティアとして参加し、子どもたちの活動をサポートする役割を担った。このように、実際のグループに運営・参加することで、臨床の現場を体験することができた。この体験から、子どもの心の発達に関心を持ち、外部のボランティア活動に参加する者もいた。さらには、将来心理や福祉、教育分野の対人援助職に就くことや大学院への進学を希望する学生にとっても貴重な経験となり、今年度の「のびのびクラス」の活動を卒業論文のテーマとする学生も見られた。実際の活動では、学生は活動前の打ち合わせや活動後の振り返りに参加することによって、中心となってグループを運営している心のケアセンターの臨床心理士から助言、指導を受けることができ、実践を通して多くのことを学ぶ機会となったと思われる。

平成24年度の「のびのびクラス」は平成24年5月～9月の間を1クール目として実施し、平成24年11月～平成25年3月の間を2クール

目として行う予定である。

2) アドベンチャーカウンセリングの実践

アドベンチャーカウンセリングとは、1960年代後半アメリカのマサチューセッツ州の高等学校で、自己概念や社会性の向上を目指した教育プログラムとして実験的に開始した「プロジェクトアドベンチャー（Project Adventure：PA）を基盤として捉えている。アドベンチャーカウンセリングには、アイスブレイキング、ローエレメント（人の手だけで安全を確保する）、ハイエレメント（ハーネス、ロープ、ヘルメットを用いて安全を確保する）などがあり、グループの目標や成熟度によってプログラムが提供される（小西，2009）。本学では、アドベンチャーカウンセリングの技術などを活用して、大阪府交野市教育委員会との教育提携や大阪府立子どもライフサポートセンターとの連携に活かしている。以下、平成23年度のアドベンチャーカウンセリングの実践を具体的に紹介する。

（1）大阪府交野市教育委員会との教育提携

平成19年3月に大阪府交野市教育委員会と協定を結び、アドベンチャーカウンセリングを介した連携を進めた。平成23年度は、交野市内の2校の小学校の授業カリキュラムにアドベンチャーカウンセリングの手法を導入し、月2回ずつアドベンチャーカウンセリング授業を実施した。A小学校では、平成23年5月～平成24年2月まで、17回の授業を行った。この授業に、スタッフ派遣は延べ17名、学生46名が参加した。B小学校では、平成23年5月～平成24年2月まで、24回の授業を行った。この授業に、スタッフ派遣は延べ33名、学生63名が参加した。学部生も毎回ボランティア

として参加した。さらに、平成23年度は同市の小学校で「Live! TIES」という遠隔指導などが可能な機能を利用し、小学校と本学を結び、本学にいるスタッフと会話やチャットによる双方向のやりとりを行った。なお、この「Live! TIES」の詳細は、3. 評価基準の運用に後述する。

小学校の授業への導入以外にも、同市の教職員研修や小学校内の校内教職員研修においても、アドベンチャーカウンセリングの手法を用いた研修会が行われ、これに本学教員の補助をする学生を派遣した。校内教職員研修への教員の参加人数が合計145名であった。A小学校の教職員研修は、平成23年8月22日（教員参加人数は、16名）に実施され、B小学校の教職員研修は、平成23年8月24日（教員参加人数は、22名）に実施された。その他、同市内の小学校1校で教職員研修を平成23年8月29日（教員参加人数は、23名）に実施し、同市の小学校と中学校の合同研修が平成23年8月31日（教員参加人数は、84名）に実施した。

平成24年度も引き続き、交野市の2つの小学校にスタッフや学生を継続的に派遣し、8月には教職員研修を行う予定である。

（2）大阪府立子どもライフサポートセンターとの連携

大阪府立ライフサポートセンターでは、児童福祉法の範囲の児童の不登校支援・引きこもり支援を行っている。平成22年10月に本学との間で「アドベンチャーカウンセリングによる心の教育支援に関する協定」を結んだ。本学教員及び学生を派遣して、平成24年3月まで毎月2回、アドベンチャーカウンセリング

の手法を導入したプログラムを実施した。平成23年10月～平成24年3月まで、毎回スタッフ5～9名が参加し、学生も毎回の活動に参加した。児童についても、4～8名が活動に参加した。

平成24年度の大阪府立子どもライフサポートセンターとの連携も継続する。さらに、平成24年度から大阪府中央子ども家庭センター一時保護所とも協定を結び、月2回のペースでアドベンチャーカウンセリングの手法を導入したプログラムを実施する予定にしている。

これらアドベンチャーカウンセリングの実践について、学生が実際に教育や福祉の現場に入り込み、子どもたちとのふれ合いやアドベンチャーカウンセリングの手法を通して、地域の子どもたちへのサポートが可能になった。さらに、アドベンチャーカウンセリングの実施法や、それに対する子どもたちの反応を直接肌で感じることができ、学生にとって貴重な体験の場となった。各活動においては、活動が終わった後には必ずミーティングを行い、担当教諭や心理の担当者なども交えた振り返りを実施した。ミーティングには学生も参加し、多角的な視点からの学びの場となったといえる。

3）学生サポーター派遣事業及び研修会の実施

平成18年度の奈良県生駒市と本学との全面協定にもとづいて、生駒市教育委員会と連携し、生駒市内の教育機関に学生サポーターを派遣する事業である。平成23年度は、生駒市内の中学校1校に1名、小学校6校に6名、適応指導教室に3名の学生を派遣した。また、この他、八尾市立教育サポートセンターにある適応指導教室に2名、京都府内の中学校1

校に1名の学生を派遣した。そして、派遣する学生たちを対象に、学校臨床の経験が豊富な外部講師（臨床心理士）などによる定期的な学生サポーターの事前事後の研修会（月2回17：00～19：00）を実施し、活動が実践的な学びに結びつくように様々なフォローを行った。

平成24年度においても生駒市を中心とした学生サポーターの派遣や事前事後研修にも力を入れていく。具体的には、4月～学生サポーターの新規の登録者の募集を開始し、事前研修も行っていく。5月～7月にかけて、学生サポーターを本格的に派遣し、外部講師による事後研修やケースカンファレンスも定期的の実施する。

3. 評価基準の運用

1) GPA

平成22年度から本格的に本学の全学部においてGPA（Grade Point Average 平均成績係数）制度が整備された。GPA制度は、本取組におけるコアカリキュラムと地域支援カリキュラムを含む全ての講義に対応している。GPAは、各講義などの5段階の成績評価（S、A、B、C、不可・欠席）に対して、S=4、A=3、B=2、C=1、不可・欠席=0という得点を付与し、算出する。平成23年度は、心理福祉学部の学生を対象に、なんらかのプロジェクトチーム活動に参加した学生（以下、参加群 $N=51$ ）と活動に参加していない学生（以下、未参加群 $N=509$ ）に分けて、 t 検定によるGPAの平均値を比較した。その結果、参加群が2.79点（ $SD=.89$ ）、未参加群が2.17点（ $SD=1.05$ ）であり、有意に参加群の平均値が高いことがわかった（Figure 1）。

しかし、今回は両群ともプロジェクトチーム活動に参加前と参加後のGPAの比較を行っていないこと、GPA制度では、授業の履修を辞退せずに履修放棄をした場合に成績評価が0点になることがあり、今回の分析結果にそのような学生の存在が影響を与えていることなどの課題が残されている。平成24年度では、これらのデータの分析を通じて、本学部のGPAの目指す数値目標の設定につなげていきたいと考えている。

2) e能力アセスメント

TIES（Tezukayama Internet Educational Service）という本学独自のネットワーキング型教育システムの機能の一つを使用した。平成23年度は、心理学科ゼミナールⅠ・Ⅱ、心理学科の演習・実習科目の計8科目、心理学科の基礎理論的講義科目の計6科目でe能力アセスメントを実施した。e能力アセスメントの評価などをTIES上にある各学生の学習ポートフォリオに蓄積させることで、学生の総合的な学習成果として役立てることを目指している。

平成23年度に実施したe能力アセスメントの「学習後の自己評価」に焦点を当て、分析を行った。自己評価は、各科目を1年間受講

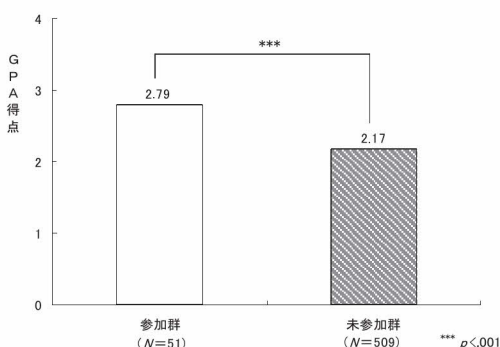


Figure 1 参加群と未参加群とのGPA得点の比較

して学生自身の能力がどの程度、身に付いたのかを評価したものである。学生は、各講義担当者が指定した3～6個の講義目標項目（項目例：【論理的思考力；論理的に筋道を立て、他者を納得させる説明ができる】、【対人葛藤解決能力；お互いが納得した形で対立する問題を解決することができる】、【問題発見能力；講義などの内容から問題を見つけ、自らに必要な課題を見出すことができる】など）について、15回の講義が終了した後に自己評価（A：大いに身についた／B：まあ身についた／C：変わらない）を行うように指示された。

次に、今回はその学生の自己評価をA=3、B=2、C=1という数値に変換し、以下の分析を行った。平成23年度にe能力アセス

メントを実施した授業形態を3形態に分類した。具体的には、心理学科ゼミナールⅠ・Ⅱを「ゼミナール」とし、心理学科の演習・実習科目の計8科目を「実習」とし、心理学科の基礎理論的講義科目の計6科目を「講義」とした。t検定による授業形態別の前期・後期の自己評価の平均値の比較を行った。その結果をTable 3、Table 4、Table 5に示した。

「ゼミナール」における自己評価は【論理的思考力】と【対人葛藤解決能力】が前期よりも後期で有意に高くなっていた（Table 3）。これはゼミナールを1年間通して受講することで、卒業論文の作成以外にもゼミ内での発表や共同作業を通して、これらの能力が身につく機会になったと考えられる。

「実習」における自己評価は【論理的思考

Table 3 「ゼミナール」における前期／後期の学生の自己評価の比較

	N	前期		後期		t値
		M	(SD)	M	(SD)	
問題発見能力	31	1.81	(0.70)	1.87	(0.62)	0.53
問題解決能力	24	2.04	(0.62)	1.96	(0.62)	0.46
情報収集分析能力	34	2.09	(0.67)	2.09	(0.67)	0.00
論理的思考力	40	1.78	(0.66)	2.33	(0.62)	3.85***
自己管理能力	41	1.88	(0.75)	2.20	(0.72)	1.62
コミュニケーション能力	32	2.00	(0.67)	2.06	(0.80)	0.27
行動力	36	1.94	(0.67)	1.94	(0.72)	0.00
対人葛藤解決能力	26	1.69	(0.74)	2.19	(0.75)	2.11*

注) 得点の範囲は1～3点

* $p < .05$, *** $p < .001$

Table 4 「実習」における前期／後期の学生の自己評価の比較

	N	前期		後期		t値
		M	(SD)	M	(SD)	
論理的思考力	136	1.64	(0.59)	1.85	(0.62)	3.28**
共感力	61	2.28	(0.55)	2.16	(0.71)	1.07
自己管理能力	83	1.96	(0.63)	2.05	(0.62)	1.12
コミュニケーション能力	76	2.18	(0.67)	2.28	(0.60)	0.96
対人葛藤解決能力	75	1.85	(0.65)	1.81	(0.63)	0.47
Team Building Skill	83	1.96	(0.69)	1.95	(0.64)	0.15

注) 得点の範囲は1～3点

** $p < .01$

Table 5 「講義」における前期／後期の学生の自己評価の比較

	N	前期		後期		t値
		M	(SD)	M	(SD)	
問題発見能力	102	1.61	(0.49)	1.78	(0.57)	2.62*
情報収集分析能力	106	1.77	(0.54)	1.79	(0.53)	0.25
論理的思考力	176	1.88	(0.60)	1.98	(0.59)	1.74†
自己管理能力	168	1.82	(0.64)	1.85	(0.66)	0.54

注) 得点の範囲は1～3点

† $p < .10$, * $p < .05$

力】が前期よりも後期で有意に高くなっていた (Table 4)。これは実習を1年間通して受講することで、自分自身が感じたことを他者に発表するなどの経験を通して、この能力が身についたと評価したためと考えられる。また、その他の項目に有意差が見られないのは、前期が終わった段階でこれらの能力が身についたと解釈することもできる。

「講義」における自己評価は【問題発見能力】が前期よりも後期で有意に高くなっていた (Table 5)。これは講義を1年間通して受講することで、授業で受ける内容の現状を知ることができ、それをレポートなどにまとめることで関心のある課題を見出すことにつながったと推測される。

平成24年度では、引き続きこれらの科目群でe能力アセスメントを実施する予定にしている。さらに、これらの評価などをTIES上にある各学生の学習ポートフォリオに蓄積をさせていく。

3) 外部評価者チェックシート

プロジェクトチーム活動に参加している学生を対象に、外部評価者（臨床心理士などの専門家）によって学生の課題や成長度の変化の評定を依頼するために、e能力アセスメン

トの各項目などをもとにチェックシートを作成した。これを使用し、各活動に関わりのある専門家からの学生評価を受けた。本稿では、「のびのびクラス」の第1クールの活動に参加した10名の学生の外部評価者によるチェックの結果を分析した (Table 6)。

この結果から、活動後のほうがすべての項目において有意に高く、「のびのびクラス」の活動を行った学生に対して、これらの能力が上がったと担当者が判断したことがわかる。これは、学生が意欲的にプログラムの企画・準備段階から参加し、子どもたちとともに活動し、さらにはその後の振り返りで臨床心理士などから専門的な助言や指導を受けることで、諸能力の向上につながったことが反映されていると考えられる。平成24年度も引き続き、プロジェクトチーム活動に参加している学生を対象に、外部評価者チェックシートを用いた評価を実施していく。

4) Live! TIESの実施

本学のTIESの機能の一つとして、「Live! TIES」を利用して、外部と本学とをつなぎ、本学にいるスタッフと会話やチャットによる双方向のやりとりをリアルタイムに行い、外部で活動している学生の遠隔指導や学生の行

Table 6 「のびのびクラス」外部評価者シートの事前と事後の比較

	事前		事後		t値
	M	(SD)	M	(SD)	
自己理解	2.80	(0.79)	4.10	(0.57)	4.33 **
コミュニケーション能力	2.70	(0.68)	4.30	(0.48)	7.24 ***
マナー	2.30	(0.68)	4.20	(0.63)	10.59 ***
team building skill	2.40	(0.52)	4.10	(0.57)	5.67 ***
共感力	2.60	(0.70)	4.30	(0.68)	6.53 ***
自己管理能力	2.90	(0.88)	4.10	(0.74)	3.67 **
楽しむ力	3.40	(0.70)	4.80	(0.42)	6.33 ***
他者理解	2.80	(0.63)	4.30	(0.48)	5.58 ***
表現力	2.40	(0.70)	3.90	(0.57)	6.71 ***
積極的に取り組む姿勢	3.00	(0.67)	4.60	(0.52)	4.71 **

注1) N=10

注2) 得点の範囲は1点~5点

** p<.01, *** p<.001

動を評価した。平成23年度は、3回（6月17日、7月14日、12月9日）の活動を実施した。同現場では本学教員が解説を行い、大学にいながらリアルタイムに活動を理解することができた。また、平成23年度は「Live! TIES」で録画した画像を教材にし、活動を行ったメンバーで「アドベンチャーカウンセリング研修会」を3回（7月12日、7月28日、10月20日）実施した。そこでは、実際に担当教員や活動をしていた学生が振り返りを行い、成長や課題を客観的に確認したりすることができた。

5) テキストマイニング

平成23年度も学生の成長を評価する一つの方法として、テキストマイニング手法を用いた。テキストマイニングとは、レポートなどの自由記述文の言葉や文章を、質的に分析して、新たな法則性や知見を得るといった手法である。自由記述文などの質的なデータを分析できる「評価分析システム TRUSTIA」を使用し、地域支援論Ⅰ・Ⅱなどの講義のレポート課題に対してテキストマイニングを行った。

地域支援論Ⅰの前半の授業の結果を、Figure 2に示した。結果として、学生の興味分布は「自殺」（使用語彙回数224回）、「支援」（使用語彙回数180回）、「地域」（使用語彙回数124回）、「学生サポーター」（使用語彙回数29回）、「言葉」（使用語彙回数26回）という語彙への興味があり、これは本講義担当者の「自殺予防」の講義を踏まえた結果だと考える。

地域支援論Ⅰの後半の授業を、Figure 3に示した。結果として、学生の興味分布は

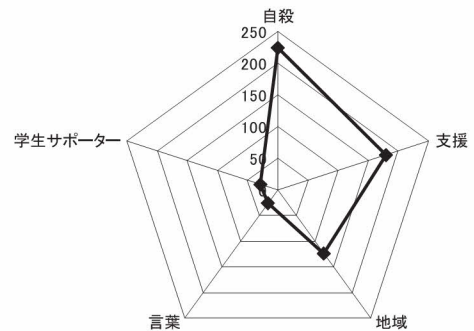


Figure 2 地域支援論Ⅰ（前半）語彙分布

「地域」（使用語彙回数250回）、「福祉」（使用語彙回数205回）、「ボランティア」（使用語彙回数185回）、「障がい者」（使用語彙回数81回）、「生活保護」（使用語彙回数70回）という語彙への興味があり、これは本講義担当者の高齢者などの地域生活支援といった講義を踏まえた結果だと推測される。

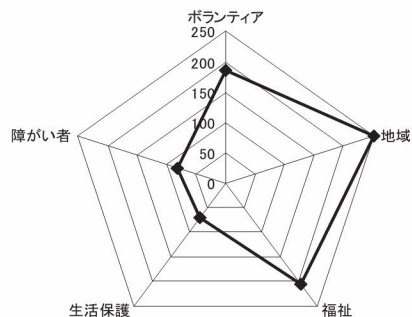


Figure 3 地域支援論Ⅰ（後半）語彙分布

地域支援論Ⅱの前半の授業の結果を、Figure 4に示した。結果として、学生の興味分布は「虐待」（使用語彙回数269回）、「支援」（使用語彙回数205回）、「被害者」（使用語彙回数93回）、「里親」（使用語彙回数84回）、「家族」（使用語彙回数44回）という語彙への興味があり、これは本講義担当者の子どもの虐待の理解と援助といった講義を踏まえた結果だと考えられる。

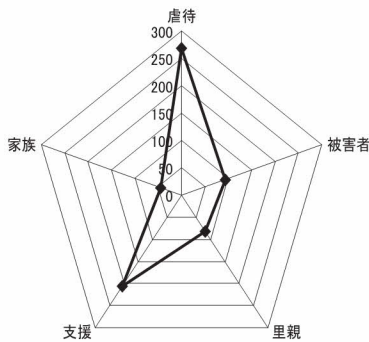


Figure 4 地域支援論Ⅱ（前半） 語彙分布

地域支援論Ⅱの後半の授業の結果を、Figure 5に示した。結果として、学生の興味の分布は「不登校」（使用語彙回数67回）、「DV」（使用語彙回数67回）、「コミュニティ心理学」（使用語彙回数50回）、「寂しさ」（使用語彙回数45回）など様々な語彙に興味があったが、語彙への興味だけではなく、実際の「支援」（使用語彙回数174回）の在り方に興味がある学生が多くいたことがわかった。

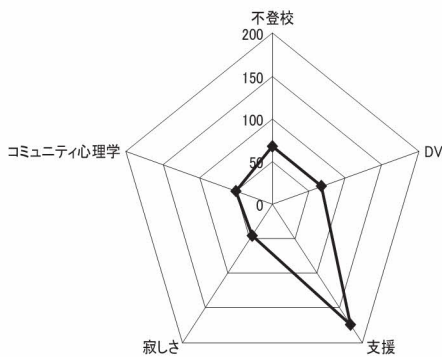


Figure 5 地域支援論Ⅱ（後半） 語彙分布

平成24年度も引き続き、「地域支援論Ⅰ・Ⅱ」などの講義のレポートを中心にテキストマイニング手法を活用していく。

4. 心理学部シンポジウムの開催と心理福祉勉強会の実施

平成23年7月9日に、本学学園前キャンパ

スにて第2回心理学部シンポジウム「発達障がいをもつ人々への支援の現状と展望」を実施した（コーディネーター：帝塚山大学心理学部心理学科 大久保純一郎、シンポジスト：奈良県発達障害支援センターでいあ～ 志野静穂氏、なら障がい者就業・生活支援センター「コンパス」小島秀一氏、本学心のケアセンター帝塚山大学SST研究会）。このシンポジウムに、他大学や本学の学生、教職員、医療機関職員、地域の方など123名の参加者があった。アンケートには「成人期の方の支援について焦点を当てられた講義は初めて受けたので、有意義と思った」「奈良県での支援の現状をうかがえて、よかった」などの意見が寄せられた。

さらに、平成23年11月26日に、本学学園前キャンパスにて第3回心理学部シンポジウム「学齢期の発達障がい児への支援の現状と展望」を実施した（コーディネーター：帝塚山大学心理学部心理学科 大久保純一郎、シンポジスト：帝塚山大学心理福祉学部地域福祉学科講師 周防美智子、奈良教育大学教育実践開発研究センター 特任専任講師 大久保千恵氏、きょうこころのクリニック院長 姜昌勲氏）。このシンポジウムに、他大学や本学の学生、教職員、医療機関職員、地域の方など112名の参加者があった。アンケートには「初めての視点だったので、どのお話も分かりやすく参考になった」「様々な立場の先生方からお話が聞けて目の前が開けた感じがした」などの意見が寄せられた。本学の取組を広く地域に知ってもらおうとともに、現段階での成果と課題を振り返ることができた。第2回、第3回心理学部シンポジウムともに、発

達障がいへの理解を深めることができる機会となった。平成24年度も引き続き、学生と地域住民を対象とした公開シンポジウムを開催する予定にしている。

シンポジウムの対象は広く地域に開かれたものであるが、より本学の学生を対象をしぼって、学生が関心のある領域の専門家を外から招聘するものに「心理福祉勉強会」がある。平成23年度には3回実施し、第1回目は、平成23年5月25日に、「学校の中の子どもたち—子どものうつと問題行動の関連」をテーマに、本学心理福祉学部地域福祉学科 周防美智子が講師を担当した（本学の教職員や学生15名が参加した）。第2回目は、平成23年6月23日に、「ライフストーリー—生い立ちを大切にすること—」と題し、情緒障害児短期治療施設 益田啓裕氏より講義を受けた（本学の教職員や学生32名が参加した）。第3回目は、平成23年12月15日に、「子どもと関わるとは？—今までの臨床経験から学んだこと—」をテーマに、八尾市立教育サポートセンター大畑 豊氏より講義を受けた（本学の教職員や学生30名が参加した）。様々な現場で活躍されている先生方からの講義を聞くことができ、学生にとっては貴重な機会となった。

5. 心理福祉教育推進室の運営と外部評価委員会の開催

平成22年11月より任期制教員1名と教育事業支援者2名を採用して発足した心理福祉教育推進室は、平成23年度も引き続き、本補助事業の全体的な取組を運営し、大学内の関係教職員及び学生の調整、さらには外部の諸機関と連携する際の大学側の窓口としての役割

を果たした。心理福祉教育推進委員会（学部長、両学科主任、心のケアセンター長、心理福祉教育推進室のスタッフなどで構成される）を月1回開催し、関係教職員へ取組の活動を報告し、予定されている計画・予算執行の実施に向けて話し合いを行った。また、平成23年8月には、大学教育推進プログラムの活動をまとめたニュースレター第2号を1500部発行し、平成24年3月にニュースレター第3号を1500部発行した。本学教職員や大学関連施設に加え、奈良県を中心とした近畿圏内の教育機関、福祉施設、医療機関などに発送した。さらには、平成24年3月に平成22年度と平成23年度の活動内容をまとめた「帝塚山大学 大学教育推進プログラム報告書」を50部発行し、本学教職員などに配布した。

また、任期制教員と教育事業支援者が、平成23年11月～平成24年3月までに、3回にわたる他大学のシンポジウムなどに参加して、様々な大学の大学教育推進プログラムの取組に関して情報を収集した。平成24年度においても、心理福祉教育推進室の継続的な運営を行い1～5の活動の円滑な実施を目指している。さらに、各活動の現状を本学のホームページ (http://www.tezukayama-u.ac.jp/special/gp/2010/education_reform/) へ掲載するなど、本取組について学内外への広報活動に努めている。

このような各活動及び平成24年度の活動計画に関して、平成24年2月28日に「平成23年度帝塚山大学 大学教育推進プログラム 心理福祉分野の学士力基準構築と人材の育成 第2回外部評価委員会」を実施した。外部評価委員長の甲子園大学教授・大阪大学名誉教授：

南 徹弘氏、大阪大学教授：井村 修氏、きょうこころのクリニック院長：姜 昌勲氏の3名の外部評価委員に、本大学からは蓮花心理学部長をはじめ7名の教職員が参加した。約1時間かけて心理福祉教育推進室より、平成23年度の事業報告や、平成24年度の事業計画の説明を行い、その後、質疑応答、意見交換の時間を持った。各外部評価委員からは、「評価を基礎的に実施している点」「地域に密着し、連携をしながら、実践の場を設けている点」などを高く評価していただくとともに、特に「評価や活動の整理・見直し」及び「質的分析の活用」が今後の課題となるとの貴重なご意見をうかがうことができた。平成24年度末に、第3回外部評価委員会を実施する予定である。

Ⅲ. 今後の課題と展望

平成23年度は、各プロジェクトチーム活動や評価基準の運営を継続的に実施した。評価基準に関しては、数量的な分析を可能な限り行い客観的なデータを蓄積することができた。例えば、GPAの平均値の比較からは、プロジェクトチーム活動に参加した学生のGPAのほうが活動に参加していない学生のGPAより有意に高いということがわかった。さらに、e能力アセスメントでは、授業形態別の前期・後期の自己評価の平均値の比較を行い、各授業形態において学生が身につけた能力の特徴を明らかにすることができた。このような分析結果については、外部評価委員会において高い評価を受けるとともに、先に挙げたような「評価や活動の整理・見直し」や「質的分析の導入」という指摘を受けた。この

指摘にそって今後の本取組の課題を①～③にまとめ、最後に今後の展望を述べることにする。

①「学内の評価基準の充実」：例えば、GPAにおいては、プロジェクトチーム活動に参加前と参加後のGPAの比較を行っていないこと、履修辞退制度などもあわせてこの制度についての学生の理解を深めることなどが課題といえる。今後は、継続的にGPAのデータを蓄積し、活動参加前と参加後のGPAの比較なども含めて、様々な視点での分析を行うことが必要である。さらに、学生がこの制度をより理解するために、履修ガイダンスの場で具体的なデータを用いて説明し、周知させることも必要であろう。また、現行のe能力アセスメントでは、学生に半期15回の各授業を通して自分自身の能力がどの程度身についたのかを自己評価させている。しかし、より正確にはその授業の開始時点で学生自身がそれらの能力がどの程度自分にあると思っているのかという点を評定することが望ましく、質問手法などの改善に関して、本学のTIES教材開発室との意見交換を今後も継続していくことが求められる。

②「学外の関係者からの評価」：大学の独善的な活動にならないためにも、この活動に関わる外部の教育委員会や教師、各施設のスタッフなど周囲の関係者へのインタビュー調査などを行うことも今後の課題である。さらに、今回は「のびのびクラス」に関わる専門家からの学生評価のみを分析対象としたが、それ以外のプロジェクトチーム活動に関する専門家による学生評価の分析も進めていく必要がある。

③「質的分析の活用」：プロジェクトチーム活動などに参加している学生のために質的分析をより活用することである。これに関しては、学生の成長や様々な活動からの影響を数値のみで示すだけではなく、学生の感想や体験談などの質的データを、半年や一年というある程度長い期間の単位でまとめてその変化をフォローしていくことなどが考えられる。さらに、このような質的データについてテキストマイニング法による分析も行い、量的分析とともに学生の成長を総合的に把握していくことも課題の一つといえる。

最後に今後の展望であるが、平成23年度は各活動が本格的に実施され、学生は新たに開講された「地域支援論Ⅰ・Ⅱ」を受講し、プロジェクトチーム活動などに参加し、様々な経験をする中で、着実に成長していることがわかった。本取組は学生が様々な経験を通して、どのような変化があったのかをいくつかの評価基準を用いて評価し、次の学びにつなげていくことを目的としている。平成24年度は平成22年度からはじまったこの取組の総括を行う必要がある。そのためにも、①～③の課題を踏まえながら、量的・質的データの収集と分析、及び学生への結果のフィードバックを引き続き行い、心理福祉分野を専攻する学生へ多様な学びの場を提供し、総合的な評価基準を構築していきたいと考えている。

謝 辞

本取組は、学内外の多くの方のご協力の上に成り立っており、ご協力いただいた全ての方に心から感謝いたします。なお、本報告は、関西心理学会第124回大会で発表したものを大幅に加筆修正したもので

あり、当日、貴重なご意見を下さった先生方に深く感謝いたします。

文献

- 小西浩嗣 (2009) : アドベンチャーカウンセリングとは何か 蓮花一己・三木善彦編 こころのケアとサポートの教育—大学と地域の協働— 帝塚山大学出版会 pp47-51.
- 中地展生・成内有奈・蓮花一己 (2012) : 心理福祉分野の学士力基準のための新しい取組—大学教育推進プログラムによる高度専門的職業人の育成— 帝塚山大学心理学部紀要, 1, 201-213.

New Approach for Establishing Standards of Bachelor's Degree Holders' Abilities in the Fields of Psychology and Welfare (2)

: Higher Education of Professional Specialists Based on the Program for Promoting University Education Reform

Nobuo Nakaji, Yuna Naruuchi, Kazumi Renge

Abstract

We are promoting the approach "Establishing the Standards of Bachelor's Degree Holders, Abilities for Developing Talented Persons in the Fields of Psychology and Welfare" in Tezukayama University. This approach was adopted in the "Programs for Promoting University Education and Student Support Program for Reforming University Education" of the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in the year 2010. This article discusses specific approaches that the community support theories, the project team activities, and assessment procedures have taken and points out tasks of fiscal year 2011. One assessment procedure for students was the grade point average (GPA). Analysis of the GPA in 2011 indicated that the "project team activities participation" group was significantly higher than the "non-participation" group. Furthermore, the assessment using Tezukayama Internet Educational Service (TIES), which compared the mean of students' self-evaluation score of the first half year with the second half year, revealed that students acquired logical thinking and the ability to solve interpersonal tangles through seminars. These approaches were highly evaluated by the Committee for External Evaluation, but the following tasks remain: (a) improving the assessment procedure of our university inside and outside, (b) obtaining more useful evaluations from outside people, and (c) utilization of qualitative analyses such as comments of students who participated in project team activities.

Key words : university education, Bachelor's degree holders' abilities, assessment